

談話における声門制御 (Glottis Control) の 役割への一考察

近藤 富英

キーワード：non-verbal communication, glottal control, discourse analysis

1. はじめに

コミュニケーション活動において、実際に使用されるのは言語のみではなく、体の動きや顔の表情、さらに言語とは別な音声が、言語と相互に関連することにより、実際のコミュニケーションは成り立っている。「言語とは別な音」として発話中に容易に観察できるものとしては、吸気 (ingressive), 呼気 (egressive), スー音 (hissing sound), ラッフイング (laughing), ギグリング (giggling), 声門制御 (glottis control) などがある。吸気や呼気は発話中に息を吸い込んだり吐き出したりすることであり、とくにスー音は日本人に特徴的だとも言われるが、舌端と歯茎のやや後ろを摩擦しながら出す音である。これらは呼吸に関連した生理的な側面を持ちながらも、ヘジテーションやターン・ティッキングなどの役割を担っていることが知られている。ギグリングやラッフイングはいわゆる「笑い」であるが、相手や自分への反応として使用されながら、当事者間の話題を盛り上げたりもする。最後にあげた声門制御は、一瞬の間息を呑みながら、声門をコントロールして息が混ざったように発声することであるが、それが現れる場所があり、そして特定の働きを持っていると考えられる。また、声門制御はほとんどの場合は、吐く息が混ざるが、まれに息を吸うように発話されることもある。本稿では、声門制御がいつ使用され、どのような役割を持っているのかを明らかにすることを目的とする。

2. 研究の背景

1950年代になって、コミュニケーション行動において言語以外に使用されるものとして、身振り (Kinesics) と言語以外の音 (パラランゲージ=paralanguage) の二つのコミュニケーション・システムの研究がジョージ・トレーガー (George Trager) やレイ・バードウィステル (Ray Birdwhistell) らによって始められた。トレーガー (1958) は実際の発話から離して研究ができる音声活動を「音性 (voice qualities)」, 実際に話される音そのものを「発声ぶり (vocalizations)」と呼び、ふたつを区別している。トレーガーは、パラランゲージの重要性を認識していたが、その役割などにはまだ触れておらず、パラランゲージの音の特質によって分類をしたのみであった。本論で取り上げる声門制御は実際の談話を基にそ

の機能を考察しているの、トレーガーの分類から一步進んだ発声ぶりの研究ということになる。

パラランゲージの研究はなかなか進まなかったが、同じころ始められた身振り(kinesics)の研究は、やがてポール・エックマン(Paul Ekman)(1979)らにより、かなりの進展を見た。エックマンは、カイネシックスを果たす役割によって分類を試みたのである。

フレッド・パン(Fred Peng)(1983)は、言語、カイネシックス、パラランゲージをそれぞれシステムとして捉え、そのシステムの間をインターシステムの機能(Intersystemic Function)と名付けた。すなわち、言語、カイネシックス、パラランゲージという三つのシステムがどのように関係して働き機能しているかを見ようとするものである。

3. データ・ベースについて

3.1. データについて

データとして使用したのは、2004年9月29日に放送されたインタビュー番組の『徹子の部屋』(テレビ朝日系)である。談話の研究においては、データ・ベースの作成が準備段階で大きな比重を占めるが、文字とそれに伴うパラランゲージやカイネシックスを記入したものが作成できると、その同じデータ・ベースを基にして、さまざまな角度からの分析・研究が可能となる。近藤(2005)ではポーズ、近藤(2006)ではギグリングなどを考察したが、今回使用したのは同じデータ・ベースである。

データ・ベースについて、あらためて簡単に説明しておく。上述したように司会役の黒柳徹子がゲストをスタジオに招き、正味30分の対談をする番組である。ゲストはシンガー・ソングライターのタケカワユキヒデであり、話題はゲストであるタケカワユキヒデの次女の結婚式についてである。

3.2. データ・ベース作成方法について

データ・ベース作成の手順は次のようなものである。(1)適当と判断した番組を録画する(今回は『徹子の部屋』)。(2)データ・ベースとして利用するには、開始からの時間やある行動の始まりや持続時間などを知る必要があるの、タイマーを使い画面に1/10秒ごとの経過時間を付ける。(3)音声をオーディオ・テープに録音し、そのオーディオ・テープを基にして、会話全体をデータ・シートに書き起こす。データ・シートとは言葉と今回の声門制御などのパラランゲージ、アイコンタクトや手の動きなどのカイネシックスの三つを同時に記録するために開発したデータ用紙のことである。これにより、どんな行動がいつ、そしてどんな行動と一緒に生じているかなどを簡単に把握することができる。(4)タイマー入りのビデオを見ながら、書き起こした文字に沿って、あらかじめ決めた記号を使いながら、パラランゲージと身振りを記録していく。本論では声門制御の働きについて考察することが目的なので、とくに声門制御に着目するわけであるが、笑いやあいづちなどとも関係していることが考えられるので、パラランゲージやカイネシックスも同時に記録する。

3.3. データ・シートについて

データ・ベースは下記に示したデータ・シートに記録することによって作成する。すなわち、B4の大きさの用紙を横向きに使い、上下2段に分けて、それぞれ黒柳 (K) とタケカワ (T) の2人のコミュニケーション行動が記入できるようになっている。それぞれの記入部分は、言語記号 (L) とパラランゲージ (P), さらに身振り動作などのカイネシックス (K) を記入する三つの部分に分かれている。なお、一番上のTには番組が始まってからの分と秒が記入できるようになっている。

| | | |
|---|--------|--|
| T | 分 秒 | |
| K | K | |
| | P | |
| | L | |
| T | K | |
| | P | |
| | L | |

3.4. データ・シートに使用する記号

L (言語記号) には、実際の発話をそのまま記録するが、漢字かな混じりの正書法を用いた。Pはパラランゲージを記録する欄であるが、声門制御 (Glottis Control) の生じた個所にはGcとい記号を用いた。インターアクションの中で、視線や腕の動きなど特徴的な動作があった場合はK (カイネシックス) の欄にその動きを記録した。以下に使用した記号について記しておく。

パラランゲージについて

- Gc (Glottis Control) : 声門制御
- Ing (ingressive) : 吸気
- Hiss (hissing sound) : 吸気 (スー音)
- Nod (nodding) : あいづち
- Ey (eye contact) : 視線を合わせる
- Ps (pause) : ポーズ
- Gi (giggling) : ギグリング
- Lf (laughing) : ラフフィング (声を伴う笑い)
- Te (tempo) : 速さ
- > : 継続と終了点を示す

カイネシックスについて

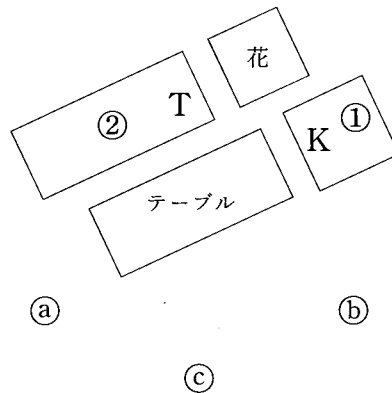
- 次の記号を用いながら、言葉を付加して説明を行った。
- Hd : 頭, Rt : 右, Lt : 左, BA : 両腕, RtA : 右腕, LtA : 左腕, BH : 両手, RtH : 右手, LtH : 左腕, Pst : 姿勢, Bw : おじぎ, Nd : うなずき, Sm : ほほ笑み (声を伴わない笑),

Ey：視線

三種類のシステムを同時に書き表すことにより、時間の経過とともに全体の活動が総合的に把握でき、また二人の行動が重なっても同時に表すことができる。ただし、画面に一人しか映されていない場合は、その人のカインセックスは不明となり、これがテレビ番組を使用するデメリットのひとつであるが、今回は正門制御がテーマなので、大きな支障にはなっていない。

3.5. 参加者とスタジオのセット

番組の収録場所は、テレビ局のスタジオのセットであり、青空と緑が向こうに見えるガラス窓を模した背景を背に、二人のための椅子とソファが120度ほどの角度で配置されている。向かって右の椅子には黒柳（K）が座り、左側のソファにはタケカワ（T）が座っている。ソファと椅子の間のサイドテーブルには花が置かれ、二人の前にはテーブルが配置され、コーヒーが出されている。以上を図示すると、概ね以下のような配置になる。



①に黒柳が座り、②にタケカワが座っている。テレビカメラはa, b, cの3ヵ所にあるらしく、aが黒柳を、cがタケカワをそれぞれ大写しにして、bが二人を同時に撮影しているようである。

4. 結果と考察

先に触れたように、声門制御（Glottis Control）とは声門が制御され、息が混ざったような発声のことであるが、以下のような使い方がされていることがわかった。すなわち、(1)感嘆を示すとき(2)あいづちを打つとき、(3)ヘジテーションのとき、(4)ターン・ティッキングに関係するとき、(5)確認を行うとき、(6)意味を強めるとき、の6つの場合である。その箇所のデータ・シートを示しながら、それぞれについて説明を加える。なお、声門制御（Gc）には、網掛けを施してある。

4.1. 感嘆を示すとき

感心したようなときに声門制御が見られることがある。次の例のように相手の発話に対して驚いたときなどはよく見られる。

例1:

| | | | |
|---|----|--------------------|-----------|
| T | 分秒 | 3 6 | 9 |
| K | K | Pstをやや下に向ける Nd---→ | |
| | P | Gc | |
| | L | 年頃の娘が | ねえ、すごいです。 |
| T | K | Nd-----→ | |
| | P | | |
| | L | ゾロッといますね | |

上の例では、K (黒柳) が、T (タケカワ) の「子だくさん」ぶりを話題にしている。Tには20歳前後の娘が4人いるのだが、Kが「年頃の娘が」と言うと、そのあとを受け「ゾロッといますね」と続けている。それを聞いてKは、「ねえ」と答えている。この時息が混ざったような発声になっている。息と一緒に吐き出したほうが、驚いているという強い印象を与えられるからであろう。このほか「あっ、そう」、「あー」、「わぁ」「へえ」などとも一緒に声門制御が用いられることが多い。ほとんどが、Kによるものが多いのであるが、これは女性の方が多いという性差というよりは、Kが聞き手なので、立場上、感心や感嘆が多いものと思われる。

4.2. あいづちを打つとき

コミュニケーションにおいては、フィードバックが重要な役割を果たし、「あいづち」もそのひとつであるが、この「あいづち」が、声門制御を伴うことがある。

例2:

| | | | |
|---|----|--------------------|-------|
| T | 分秒 | 5 30 | 33 34 |
| K | K | | |
| | P | Gc | |
| | L | えー | |
| T | K | | |
| | P | Pstをうしろへ Nd---→ | |
| | L | ということで持ちかけたんですけどね。 | そうしたら |

上記は、Tが手作りでもいいから結婚式をすることを提案した件を話しているのであるが、うなずき (Nd) ながら話すと、Kは「えー」と「あいづち」を打っている。前項の例と異なり、感嘆ではない、ふつうの「あいづち」でも声門制御は見られることがわかる。

4.3. ヘジテーションのとき

ここでいうヘジテーションというのは、次に話す内容を考えているサインのことであるが、

「あー」や「えーと」など、ヘジテーション全体や語尾の母音を伸ばした個所に息が混ざることがある。

例3：

| | | | |
|---|----|---------------------|----|
| T | 分秒 | 0 23 | 25 |
| K | K | 下を向いてBHを胸のところに持っていく | |
| | P | Gc | |
| | L | このたびも、えーと | |
| T | K | | |
| | P | | |
| | L | あ、婿殿が増えました。 | |

この例は、KがTの子供たちについて話題にしようとしている箇所であるが、次女が結婚するので、Tが義理の息子がきたことを述べている場面である。Kが会うたびにTの家族が増えるのであるが、今回はといたながら、次に何を言おうかやや躊躇した場面である。そのときにK「えーと」と言うのであるが、やはり息が多い発声になっている。

なお、考えながら話しているときに、語尾がやや長くなり声門制御されている例があった。

例4：

| | | | | |
|---|----|----------------|------------------|----|
| T | 分秒 | 2 48 | 50 | 52 |
| K | K | | | |
| | P | | | |
| | L | それぐらい | | |
| T | K | Pstを後ろにそらし上を向く | 顔をKに向けて | Lf |
| | P | Gc | | |
| | L | えーと24かな | 「かな」なんてなってきちゃった。 | |

この例では、Tが今度結婚する娘の年齢を聞かれて、考えながら「24かな」と答えている場面であるが、やや不安そうに「かな」と言っている。このときに比較的に語尾を伸ばして声門制御をしていた。

4.4. ターン・テイキングに関係するとき

会話は、聞き手と話し手がそれぞれ話す順番（ターン）を交代しながら進むが、このターンの交代に関係した声門制御が見られた。

例5：

| | | | | |
|---|-------------|---------|------|--|
| T | 分秒 | 3 33 | | 36 |
| K | K P L | | | 長い、そんなに |
| T | K P L | 上を見る | Kを見る | Nd Teゆっくり Gc 僕は大学に、あの11年間いたんですよ。 |

この例は、Tが休学を含めて大学に11年間いたということを言っている場面である。「～いたんですよ」といいながら、息をまじえて発声している。語尾がやや消えゆく感じがあり、ターンを譲っていることを表していると考えられる。これを受けてKはターンを引き継いでいるのである。このように声門制御もターン・ティッキングに関係していると思われる。

例6：

| | | | | |
|---|-------------|----------|-----------|-----------------------------|
| T | 分秒 | 11 37 | 38 | 39 |
| K | K P L | | Teゆっくり Gc | コマーシャル挟みまして、このお嬢さま、かわいいお嬢さま |
| T | K P L | | | |

この例は、逆に声門制御も使ってターンを保持している例である。番組の途中でコマーシャルを挟む時間になって、ホステス役のKが、「コマーシャルを挟みまして」と言う時に、テンポをゆっくりにしなが、「て」の箇所で声門制御を行っている。このあともう少しKの発話が続くのであるが、これはターンを保持する合図でもあるようだ。このように、声門制御はターン・ティッキングに関連していると考えることができる。

4.5. 確認を行うとき

これは、「相手の同意を求めるとき」と言ってもいいのであるが、念押しの意味合いを含んでいる。

例7：

| | | | | |
|---|----|-------------------------|----|----|
| T | 分秒 | 1 9 | 17 | 19 |
| K | K | Ey-----→ Nd | | |
| | P | Gc | | |
| | L | おじいさんですから、ねえ いいと思いませんか？ | | |
| T | K | | | |
| | P | Lf-----→ | | |
| | L | はい | | |

上の例では、Tが30代で孫ができておじいさんになった、という話題の場面であるが、Kが「おじいさんですから、ねえ」と息を混ぜながら確認をしている。これは前述した感嘆の声門制御と似ていると考えることもできる。

4.6. 意味を強めるとき

特定の語の意味を強めたいときにも声門制御は使用されている。

例8：

| | | | | | |
|---|----|----------------------|----------|----|----|
| T | 分秒 | 9 38 | 39 | 40 | 41 |
| K | K | | | | |
| | P | Lf-----→ | | | |
| | L | | | | |
| T | K | | | | |
| | P | Gc | Lf-----→ | | |
| | L | 僕もね、本当は僕がやりたかったんですけど | | | |

上記の例では、Tが結婚式の牧師の役を本当はやりたかった、と述べている箇所であるが、「本当は」を発話するときに、息をまじえながら発声して語の意味を強めている。このほか、特定の語ではなく、「すみません」などと文全体を息をまじえて発声している例もあった。

発話の際に、息が混ざる声門制御であるが、以上のようにさまざまな場面で使われていることがわかる。

5. さいごに

声門制御は多くの場合、ほとんど無意識に行っている談話行動のひとつであると思われるが、上記の知見のように、いくつかの役割を持っていることがわかった。「あいづち」やターン・ティキングのようにコミュニケーションの進行に関係するものから、ヘジテーションや語や文を強めるなど、どちらかという心理的なものに関わるものがあった。

感嘆したときなどは声が大きくなるのは当然なのであるが、場合によっては息を混ぜることで、感嘆しているという印象を強めることもできるのである。ほとんど人間の生理現象とさえ言えるような声門制御も談話においては、意味合いを持たせていることがわかった。今

後の課題としては、声門制御の性差や視線などの他のシグナルとの関係などの研究が考えられる。

参考文献

近藤富英

2006 「ノンバーバル・コミュニケーション行動としてのポーズの機能と役割への一考察」,
『信州大学人文学部人文科学論集<文化コミュニケーション学科編>』, 第40号。

近藤富英

2007 「会話におけるギグリングの機能と役割への一考察」, 『信州大学人文学部人文科学論集
<文化コミュニケーション学科編>』, 第41号。

Ekman, Paul

1979 “Four Types of Facial Expression and Body Movement,” *Hidden Dimensions of Communication*, Hiroshima : Bunka Hyoron Publishing Company.

M. Swan and B. Smith (eds.).

1987 *Leaner English*, Cambridge University Press.

Trager, George L.

1958 “Paralanguage : A First Approximation,” *Studies in Linguistics*, New York : Department of Anthropology and Linguistics, University of Buffalo. Also produced in *Language in Culture and Society : A Reader in Linguistics and Anthropology*, Dell Hymes (ed.).

(言語教育センター・外国語教育部門・教授)

(2008年11月4日受理, 11月18日掲載承認)